

# 愛、見つけた

小さな命の置きみやげ



小林 完吾

愛、見つけた

© 1983 Printed in Japan.

定価 980 円

著 者 小 林 完 吾  
印 刷 株式会社堀内印刷所  
製 本 株式会社加藤製本

振替口座東京 7-2636 番  
電話 東京 (942) 2311 番  
東京都文京区音羽 1-21-11

発 行 株式会社 二見書房

0093-830582-7339



# 愛、見つけた

小さな命の置きみやげ

小林 完吾



二見書房



## はじめに

「モンゴリアンがいるんだって?……」

「お父さん、この子がいったいどういう子か、知ってるんですか?」

医者の口をついて出たこの言葉が、ダウン症候群のわが子を差別してのことと断ずべき確証があるわけではないのです。もしかしたら、それは、病気を病気と見、障害を健常と見分けるだけの、科学者としての医者の、しごくあたりまえの言いようであったのかもしれない。

でも、かりにそうであったとしても、生まれた子がダウン症と知って驚き悲しみ、そのことに怯えながら、なんとかこの子を、この子の持てる可能性いっぱい育ててやろうと心を寄せあう家族の思いには、許せない響きがあったのです。

いまさら、死んだ、ダウン症の長男・真吾の短く儂かった命を人前に晒すのは、真吾にはかわいそうであるし、生命のあるかぎり、癒えぬ傷を抱いて生きていかねばならぬ妻・愛子の傷を深めることにもなるうし、私とても気のすすむところではなかったのです。しかし、真吾が逝って三年半たった今でも耳の底に消えぬあの医者の言葉が、結局、ペンを執らせたのでした。かといつて、私はこの一文をもって現代医療を告発しようなどとは毛頭も思っていない。

それどころか、真吾の誕生や、真吾の病から死にいたるまで、心をこめてかかわってくださった病院の多くの先生や看護婦さんには、いまでも深い感謝の気持ちを抱きつづけているのですから……。ただ、いわゆる健常でない烙印をおされた者やその家族が、どんなにかそのことを気にしながら生きているのかを知っていただき、みなさんの周辺におられる障害をもった方がたや、その家族の方々に思い遣りのある心をもって接していただければ、という思いを知っていただきましたかったです。

私の周辺には、重い知恵遅れと情緒障害を併せ授かった子供さんや成人の方、そして、そうした肉身をかかえ、ときには崩れる思いもあるでしょうに、明るくけなげに生きていらっしゃる方がたくさんいます。なかには、知恵遅れと情緒障害の子供さんの親友であることを、つねに遊ぶことで示し、励ましている感動的な少年もいます。

そして、そうした人々を通して、私たち家族は本当の『愛』にささえられた『優しさ』『思い遣り』が人びとにとってどんなに大切で素晴らしいものであるかを教えられています。

それはまた、真吾がたった一〇五日という短い小さな命を賭して私たち家族に残していつてくれた『小さな命の置きみやげ』だと思っています。

なお、この一文を記すにあたって心からご協力くださった多田勝利編集長と上之二郎氏に、深く感謝します。

## 目次

### 第1章 優しさが息づく街で

一鉢のブーゲンビリア・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10

すばらしき隣人たち・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14

私の小さな親友・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17

十四年ぶりの妊娠・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26

心をよぎる不安・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 33

娘・典子の奮闘・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 40

妻あればこそ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 46

大いなるものの意志・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 55

### 第2章 涙で迎えられた子

新生児室のわが子・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 62

### 第3章 障害をもつ子の親

やるせない思い	69
罪深き父親	74
心に滲みる思いやり	80
くじけてなんかいられない	88
心ない仕打ち	95
親が死んだあとは	100
家族がひとつになって	104
真吾のための「草踏み」	108
みのり村コロニー	114
悲しみの深さ	122
散歩はきらいなの	128
立ちどまってみる人生	135

## 第4章 小さな命の闘い

さりげない心配り……………140  
愛おしさがつのる……………149

惧れていた事態……………156  
一瞬のうちの激変……………163  
人工呼吸装置ベビーバード……………168  
父としての決意……………175  
生と死の選択……………179  
わきあがる疑念……………184  
医師に嫌われようと……………189  
死なせてたまるか……………194  
一進一退……………198  
真吾、もう楽になりなさい……………204



## 第5章 つきせぬ想いを胸に

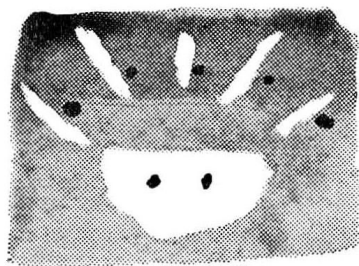
無言の帰宅	212
やり場のない怒り	215
真吾は立派な長男だった	220
愛子、けっして一人にしない!	229
精霊船の灯	233
かわりつづけていこう	238

カバー装画  
本文イラスト  
石川 黎



第 1 章

優しさが息づく街で



## 一鉢のブーゲンビリア

定年まであと四年というときになって、降って湧いたように『おもしろまじめ』キャンペーンにかつぎ出され、たちまち慣れぬスポットライトを浴びることになってしまった。

今年二月初めの『おもしろまじめ』のキャンペーン・デー、同僚の徳さん（徳光アナ）とともにテレソンでいろいろな番組に生出演なました日のことだ。新宿駅東口の街頭で雨のなかを傘ひとつでがんばり、深夜十一時の『きょうの出来事』、『11PM』まで出ずっぱり……。

無事やり終えたときには精も根も尽きはてて、一刻も早く埼玉県入間市いづまにある団地のわが家へ帰りたいかった。

サラリーマン生活二十五年目にして購入したわが家は、一千五百五十万円の3LDK。なんとか資金をかき集め、頭金を作って手にしたのが五年前だった。

ヘトヘトになった私を迎えた妻の愛子が、居間に飾られた一鉢のみごとなブーゲンビリアを指差した。

「秀子さんがあなたについて、もってきてくださったのよ。きれいでしょ。今日はきつと、あなたがあつてヘトヘトになって帰ってらっしゃるだろうからって。『花を見ていただいたら、少しは

安らいでいただけると思つて』、そうおっしゃつてくださったのよ。ありがたいわね、私、涙が出ちゃつて……」

玄関に入るまでの疲れがスーッと洗い流されていくようだった。なんと美しく優しい心の持ち主なのだろう。いまだき「花を見て安らいでもらえたら」などと思いつける方がいると知つて、あらためて秀子さんの澄んだ心を垣間見させていただく思いがした。

愛子が言葉を継いだ。

「秀子さん、こうおっしゃつてくれたんですよ、『完吾さんがテレビでああやつて活躍してくださることで、どんなに私たちの力になることか』つて……」

この言葉を聞いたとき、私は胸に熱いものがこみあげてきた。誤解していただきたくないのだが、このときほど自分の職業に感謝したことはない。傲慢な気持ちではけつしてない。こうしてブラウン管に顔を出すことで、少なくともどなたかの心の支えになれたと知らされて、自分の仕事の責任の重さを、あらためて感じたのだ。

仲田秀子さんのお宅は、重度の情緒障害をもつた洋吾クンという長男を授かっていらつしゃる。今年九歳になつた洋吾クンと、これから先、生涯つきあつていかなければならない。それが、生まれながらにして障害をもつた子の親の宿命なのだ。

その仲田秀子さんに、私がこうしてテレビの仕事をしていることを、ご家族の心の支えにし

ていただいていると聞かされて、どれほど気持ちが張りつめたことか……。

私はこれからも、一所懸命やろうと思う。

一所懸命仕事をやることで、洋吾クンのご家族に心の支えを感じていただけるならば、これほどの幸福はないではないか。

たった一〇五日の短い命であったとはいえ、ダウン症候群という障害をもった長男を授かった私ども家族にとつて、この一鉢のブーゲンビリアの美しさは、言葉では尽くせないほどに心に滲みるものがあった。

私どもの長男・真吾が生きつづけていてくれたら、いまごろ懸命に真吾を育てていなければならぬ。これから先、私が死んだあと息子も自分で生きていけるだけの術すべを見つけられる道を切り拓き、作ってやらなければならなかったはずなのだ。

それは、途方もなく重い思いに追われるような毎日だったにちがいない。真吾が亡くなって以来、どこかでホッとしている自分の気持ちを戒めるためにも、障害をもつ子供を授かった親の一人として、なにかしなければ、なにかお手伝いをしなければ、とせきたてられるような、あせりにも似た思いをもちつづけていたのだ。

なにをどうすることもできない自分が責められてしかたのない日々がつづいていた。そんなとき、秀子さんのひとことが、ハタと私に気づかせてくれたのだ。

直接的なお手伝いはできなくとも、こうして毎日、一所懸命仕事をする事で少しでもお役に立つことができる——と。

機会あるたびに、障害をもって生まれた子供の父親として、私が教えられたさまざまなことを話していこうと思う。このペンを執つたのも、こうした私の熱い思いからにはかならない。

真吾を授かり、そして喪つた今、人生って何だろうかとしみじみ思う。空いている時間、ゴルフに興ずるのも人生だろう。カラオケにうち興ずるのも人生だろう。飲み歩くこともまた然り。庭つきの家を買うのも人生かもしれない。

より出世し、その経済力で自分の生活を人より一段上のところで展開したいという欲望を満たすのも人生。経済的な成功、あるいは社会的な地位を獲得させてくれるような周囲の人びとに出会うのも人生だろう。

私はこうした人生を否定するつもりはない。

しかし、私にとっては経済的な成功や、出世をバックアップしてくれるような人びとに出会えるよりも、秀子さんたちのように、なにか大切なことを気づかせてくれるものもっている人たちと出会い、そういう人たちに囲まれていることのほうが、ずっと幸せだと思う。真吾を通して、ますますこの思いは確かなものとなった。

## すばらしき隣人たち

わが町・入間には、すばらしい人びとがたくさん住んでいる。私ども家族は、こうした人たちに囲まれながら暮らしていけることに感謝の気持ちでいっぱいだ。ここに引越す前もそうだった。茅ヶ崎の団地に住んでいた十年も、私ども家族は実に恵まれていたと思う。

入間のわが家のすぐ下にスーパーマーケットがあつて、二年前まで、その店先で焼鳥を焼いていた佐々木かよ子さんという奥さんがいる。ご主人はそのスーパーの店長さん。お店の経営者が代替わりして、いまは、その店はなくなってしまったのだが……。

家族で買い物に行くたびに、妻がレジに並ぶあいだ、私は毎度、その焼鳥の店に寄つたものだ。その女性と、たわいもない立ち話をするのが楽しみになっていた。そのうち、焼鳥の商売が忙しくなつたりすると、ウチワ片手に『いらっしやい!』と声を張りあげ、私もいっしょになつて焼鳥を焼くようになった。

ある日、その奥さんにどうもいつもの威勢がない。気になつて、

「どうしたの、元氣ないじゃない」

ときいてみると、こんな話を始めてくれた。



人間関係で悩んでいた彼女は、ある日、洋吾クンのお母さん（秀子さん）の姿を見かけ、重度の障害のお子さんを連れながら、ニコニコと明るい笑顔をたやすことのない秀子さんのように、心打たれるものを感じたというのだった。

「いつお目にかかっても、あのお母さんはニコニコと明るくふるまっていらっしゃる。どうやったら、あんなふうになれるのかしらって思ってたね、率直にうかがってみましたよ。そうしたら、秀子さんがこんな話をしてくれて……」

秀子さんは、彼女の率直な質問に答えて、こう心の内を明かしたという。

「とんでもありません。わたしだって、胸が押しつぶされるような毎日です。どうしたらいいかと、毎日毎日、気が晴れることはありませんでしたよ。こんなふうに気持ちが前向きになれたのは、洋吾の診断を下した先生のおかげなんです。厳しいお言葉をいただいて、それでやっと振った切れたようになれて……」

その先生はこう告げたというのだ。

「お母さん、あなたの考えは間違っている。洋吾クンを抱えて大変だという気持ちは、誰にもわからないんだ。これから先も、洋吾クンを抱えた生活はずっとつづいていくんですよ！ いんですか、お母さん。誰かにわかってもらおうとか、どうしてわかってもらえないんだかと思う気持ちは、なんの問題の解決にもならない。お子さんに対する優しさにもつながらないんで